

審査の結果の要旨

氏名 黄 崇修

本論文は、東アジアの「鬱」治療の基礎を定めた元代の儒医、朱丹溪、名は震亨(1281-1358)の鬱説を分析したものである。鬱説自体の解明に加えて、丹溪がいかに宋代道学思想を医学に取り入れて、『黄帝内経素問』以来の気鬱説を克服し、新たな鬱理論を構築したかを明らかにすることを企図している。全体の構成は大きく5章からなっている。

第1章では、筆者は朱丹溪の事績と思想的背景を分析し、丹溪における儒学と医学の融合を指摘する。また主著『格致餘論』を分析して、丹溪鬱説のアウトライン「欲望→陽有餘而陰不足→相火炎上→鬱症」を提示する。第2章では、医学史的角度から鬱説後半部の「相火炎上→鬱症」を分析し、丹溪に至る「鬱」思想と「相火」論の変遷について考察し、丹溪の相火論には伝統の気鬱(五鬱)説を一新したところがあると結論する。第3章では、鬱説前半部の「欲望→陽有餘而陰不足」について儒学思想史な分析を行い、丹溪が朱子学の宇宙生成論『太極図説』を身体化し、朱子の修養命題「人心聴命於道心」を自らの医説の拠りどころとし、欲望(人欲)に生じる「相火炎上」を回避する手段として礼法を重んじたことを論証する。第4章では、劉基『郁離子』を分析し、文学作品にも丹溪と同様の観点を発見し、丹溪鬱説の内因(心因)重視の斬新な性格を明らかにする。第5章では、丹溪学の真髓とされる「六鬱」説を丹溪後学の提唱としてその歴史的な展開を論じ、あわせて医案(カルテ)の分析などを通して丹溪自身の「気鬱」を根幹におく鬱説の全体像の復元を試みている。

本論文で第一に評価すべきは、従来ほとんど考察されることのなかった東アジアの鬱説について研究し、朱丹溪に収斂するフレームワークを提出したことである。東アジアにも精神治療の理論伝統が確実に存在していたことを明らかにした意義は大きい。第二に評価すべきは、丹溪医説と朱子学説の深甚な関係を明らかにしたことである。その作業は朱子学の内包を豊かにし外延を拡大している。丹溪の医学思想について論じるばあい、後の研究者は本論文を研究の基礎としなければならないであろう。

本論文には論文構成や論述法など改善すべきところもあるが、東アジア医学思想史研究の新たな視野を切り開いたことは間違いない。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士(文学)の学位に値すると判断する。